

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中国の「国境文化」の人類学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5668

固定的祭祀施設と女性の儀礼参加

タイ北部国境地域のユーミエン（ヤオ）における新たな宗教現象に関する調査報告

吉野 晃（東京学藝大学）

1. はじめに

タイ北部に居住するユーミエン（Iu Mien）は、ヤオ（Yao）と他称され、タイのほか中国南部、ヴェトナム、ラオスの山地に広く分布している。いわば、多国境を跨いで分布する跨境民族である。彼らは焼畑耕作とそれに伴う移住によって、この広い分布を呈するに到った。その結果、タイ北部にはラオス経由で19世紀後半に移住してきたと推測されている。この長駆の移住の途上で、ユーミエンは漢民族から道教的色彩の強い儀礼体系や父系理念に沿った親族組織のイデオロギーを受け入れてきた。儀礼文書は漢字で書かれており、儀礼知識の伝承も、多くは漢字による。

ユーミエンの儀礼体系は、様々な宗教運動の影響があったと考えられる。道教の正一派と同じ三清（元始天尊、靈宝天尊、道德天尊）を祀る儀礼のセットがある一方で、そうした三清に関わらない儀礼も多数ある。これは様々な宗教運動の影響が積み重なっていると見なせる。表1では、これまでタイ北部において観察あるいは伝聞した儀礼を挙げた。この中で、三清に関わるのは、2～4の儀礼である。道教の神々を描いた掛軸のような画〈大堂画〉*Tom toang faang*⁽¹⁾を十数枚壁に掛け、その神々を勧請して祀る。ユーミエンの儀礼において祭祀対象となる立体的な神像の類いは、タイのユーミエンにおいては従来なかったのである。

2. 固定的祭祀施設—儀礼の場—

2.1 移住と定住化

調査地は、タイ王国チエンラーイ県ムアン郡（Amphoe Muang, Cangwat Chiang Rai）のHCP村である。この村で起きている宗教現象の新しい面の一つは、固定的宗教施設を作ったことである。焼畑耕作に伴って移住を繰り返してきたユーミエンは、廟などの固定的宗教施設を作ったことがなかった。中国国内で定住化したユーミエンの村にはかつて廟があった村も、現在も廟がある村もある。筆者が調査した湖南省藍山県のユーミエン村落には、かつては盤王廟など3つの廟があり、神像もあったが、文化大革命の時にいずれも破壊された。そのように、定住化すると廟を作ることがあるが、タイへ移住してきたユーミエンは最近まで移住を続けてきたのであり、固定的な宗教施設を作る要因がなかった。

彼らの儀礼は、「7. 土地霊祭祀」を除くと、通常は個人の住宅で行われる。表1の2～4のような大がかりな儀礼でも、個人宅で行い、先に述べたように、〈大堂画〉を壁に掛け、本尊として祀る形にする。〈大堂画〉は持ち歩きでき、壁に掛ければそこが儀礼場になる。すなわち、各住宅がそのまま廟になる訳である。掛け軸様の〈大堂画〉は、移住生活に適応した祭祀の形であった。また、〈大堂画〉を用いない儀礼でも、自宅で壇を構えて行うのが原則である。

このような移住を前提とした生活も、タイにおける政策によって定住化が進んできた。1989年の商業的森林伐採禁止政策により、森林を伐開して焼畑耕作を行うことができなくなった。新たな耕地を求めて移住する生業が成り立たなくなったのである。また、タイ北部の山地においては、人口が増え、焼畑耕作ができる条件が減りつつあり、切り開ける無人の山林の余地がなくなりつつあった。タイにお

表 1: タイにおけるユーミエンの儀礼

	A 〈大堂画〉 <i>tom toang faang</i> を掛け、高位の神霊を招請する。	B 〈中空〈半天高樓〉に住む〈玉帝〉 <i>Nyut tai</i> へ向けた祈願を行う(〈當天〉 <i>toang tin</i> または〈叫天〉 <i>heu lung</i>)。	C AとBのいずれもなし。
1 〈盤皇〉祭祀			〈歌堂〉
	ユーミエンの祖先を救護した〈盤皇〉を祀る謝恩儀礼。姓の低位分節ごとに儀礼場のしつらえ、供物などが異なる。		
2 〈修道〉	〈掛燈〉〈度戒〉〈加職〉〈加太〉		
	道教の道士叙任儀礼の形式をとっており、受礼者には、到達した儀礼的位階に応じた儀礼名(〈掛燈〉の場合は〈法名〉 <i>faat bua</i>)と、霊界の守護兵(〈陰兵〉 <i>yin-paeng</i>)が与えられる。 ・〈掛燈〉はミエン男子が通過すべき成人式 民族アイデンティティをも規定する。		
3 祖先祭祀	〈超度〉	〈當天安墳〉* 〈析解〉[〈掛燈〉〈超度〉〈做身〉の儀礼分節として行われることが多い] 〈安翁太牌〉	〈尚翁太〉 〈尚家先〉 〈尚外祖鬼〉 〈尚外家鬼〉 〈収兵〉* 〈平安墳〉
	<p>〈超度〉: 二日二晩ないし三日三晩。比較的若い世代の〈家先〉を供養し、冥界での安泰を祈願する。この儀礼を3回行うと、死者は祖先=〈翁太〉<i>ong-thai</i>となることができる。</p> <p>〈析解〉: 祖先を害する瘟神を祓う。</p> <p>〈安翁太牌〉: 祖先の祭壇を家に設置する儀礼。</p> <p>〈尚翁太〉: 酒盞・水盃・線香・紙銭を供え、鶏一羽を供儀する。1〜2代目くらいまでの比較的若い世代の〈家先〉を供養する儀礼。</p> <p>〈尚家先〉: 4〜5代以上上輩の祖先を祀る。</p> <p>〈尚衆鬼〉: 全ての家先を祀る。</p> <p>〈尚外祖鬼〉: 家主の母方の祖先を祀る。</p> <p>〈尚外家鬼〉: 家主の妻の祖先を祀る。</p> <p>〈収兵〉*: 祖先をあの世界で苦しめている悪鬼を駆除する。</p> <p>〈平安墳〉: 祖先の墓のレプリカを清掃して墓を清める。発童を伴わない。</p> <p>〈當天安墳〉*: 発童を伴う安墳。</p>		
4 人生儀礼	〈做身〉[葬儀]		〈添人口〉 〈斥人口〉 〈出花林〉 〈做親家〉[婚礼]
	〈添人口〉: 出生、養取、入婚など、ピャオの新しいメンバーを〈家先〉に紹介し、その内の一人の〈家先〉に新しいメンバーを登録し、守護祖先とする。		
5 収魂 [生者の魂を呼び戻す]		〈當天架橋〉	〈架平橋〉[多種] 〈叫魂〉 〈贖魂〉 〈贖花〉 〈搶魂〉*
	収魂儀礼: 離脱した〈魂〉を本人の身体に呼び戻す儀礼。人間の身体各部分に離脱可能な〈魂〉 <i>uan</i> がある。総数10又は12(インフォーマントにより異なる)。〈魂〉が身体を離れる→身体の当該部位の不調→この遊離した〈魂〉を身体へ戻す。		
6 穀霊祭祀		〈入春〉	〈招稻魂〉 〈贖稻魂〉
	穀物の霊を呼び戻し、豊作を祈願する。		
7 土地霊祭祀			〈設地方鬼〉 〈設地鬼〉 〈給秋〉 〈開山〉
	土地の霊を祀り、安全を祈願する。あるいは耕地の霊を祀り、豊作を祈願する。		
8 厄祓い			〈解煞〉
	個人の身の上に掛かっている悪い作用〈煞〉を解除する。		
9 願掛け・返礼			〈許願〉[多種] 〈還願〉[多種] 〈賀年〉*
	家内安全や豊作を願掛けする。		
10 謝罪			〈釋師父〉 〈釋天地〉 〈釋契父〉
	何らかの霊に対して侵犯したために起こった不幸を、謝罪によって解除する。		
11 その他			〈設太陽月亮〉 〈設元肖鬼〉 〈奏星〉 〈設百家姓〉
	心身の不調を解消する儀礼。あるいは不調が生じぬよう予防措置をとる儀礼。		

注: *が付いている儀礼は、〈発動人〉が関わる儀礼である。

ける少数民族政策も、移動を抑制し定住化を促進して国民化を進めようとする政策であった。こうしたいくつかの要因が相俟って、タイにおいても山地民の定住化は進んでいる。ユーミエンの場合も例外ではない。多くの村が実質的に定住化している。もっとも、ユーミエンの場合は、移住は世帯単位で行われるのが通例であったので、世帯単位の移住を考えれば、今も移住は行われているとみてもいい。しかし、現在、それは焼畑に伴う移住ではなく、農外就労のための移住であり、それによって、ユーミエン村落が新たにできるような移住ではない。このように、既存のユーミエン村落は定住化してきているのである。

2.2 前史—HCL 村における〈廟〉建設—

こうした定住化に伴って、固定的祭祀施設たる〈廟〉 *miu* を作る動きが 2000 年代から顕れてきた。HCP 村に〈廟〉が作られる以前に、他のユーミエン村落において〈廟〉が作られている。その経緯はモンコンの報告 (Mongkhon 2006) に詳しい。チエンラーイ県ムアン郡の HCL 村において〈盤王〉 *Pienhung* (〈盤皇〉とも書く。詳細は後述) を祀る〈廟〉が作られた。1990 年代後半に、この村は、経済不振、覚醒剤使用、村内不和などの問題を抱えていた。モンコンによると、近隣の複数の村で、〈盤皇〉を祀ると裕福になるとの夢を見た者がいるという話があった (Mongkhon 2006: 262)。2000 年の初めに、HCL 村の 70 歳の老翁がトランスに入り、村人が〈唐王〉 *Tong Hung* の〈廟〉を建てて〈唐王〉を祀れば、混乱した状態が改善されると託宣した (*ibid.*)。〈唐王〉は後にも述べるように、ユーミエンの祖先が海を渡ったときに〈盤皇〉と共に彼らを救護した神である⁽²⁾。この託宣について、村人たちが相談した。特に年長の女性たちが〈廟〉建設に積極的であった (*ibid.*)。女性たちの中に、中国広西のヤオ族の〈廟〉へ行き、そこに祀られていた 14 体の神像の写真を撮ってきた姉妹がいた。そのうちの一人の家族が村人を説得し、寄附が集まって〈廟〉建設へ動き出した。村人の協議で、託宣にあった〈唐王廟〉ではなく、〈盤皇廟〉を作ることとなった。中国で撮ってきた写真を参考にして模造して神像を作り、〈廟〉に祀った (Mongkhon 2006: 262-263)。但し、この祭神の中には、〈唐王〉も入っている (筆者実見による)。〈廟〉は 2000 年に完成し、2001 年に開眼儀式が行われ、その後 3 年間続けて開眼儀式が執り行われた (Mongkhon 2006: 263)。筆者が 2003 年に調査したときには、〈盤王〉像の手首に紐を巻く儀式を行っていた。この儀式で特徴的であったのは、女性が多数儀式に参加し、儀式の司会、儀式中の唱歌などに積極的に参加していたことである。先にも引用したように、建設にも女性が積極的に関わっていた。

2.3 HCP 村における〈廟〉建設

このような HCL 村における〈廟〉建設は、他のユーミエン村落にも影響を与えた。HCP 村においては 2004 (仏暦 2547) 年に「ユーミエン文化センター」 *Su:n Watthanatham Iu Mian* として、木竹造の平屋建ての建物を建てた。後にこれが〈廟〉となる。表向きは宗教施設の形を取らず、「文化センター」を自称した。場所は、村の上方の尾根端に位置し、陸軍の特別部隊の駐屯地に隣接している。軍はユーミエンの〈廟〉建設に対抗してか、2011 年に〈廟〉と同じ敷地内に仏像を安置した仏堂を作った。

2009 (仏暦 2552) 年農曆八月十五日に最初の神降⁽³⁾があった。劉 MK (女性)、盤 ZF (男性)、鄧 LC (男性) の三人に〈盤王〉の霊が降り、託宣を述べたのである。そのときは、まだ文化センターには神像はなかった。主祭神の〈盤王〉の像が設置されたのは、翌 2010 年であった。そのときには〈盤王〉ほか 5 体の神像が設置された。2011 年にはさらにいくつかの像が設置された。このときの〈盤王〉の像は、以前、雲南で購入したものであるという。実際、村人の中には中国のヤオ族の許を複数回訪れている者がいる。

2012 年の農曆正月に、隣にあった集会所を改築して神像を移し、そこを〈廟〉とし、農曆三月に旧〈廟〉を取り壊した。その跡地には、コンクリート造りの正式の〈廟〉を建設する予定である。2012 年 5 月 19 日に、起工式として最初の柱を立てる儀式が行われた。2012 年 8 月現在、土台と柱はできているが、屋根と壁の取り付け工事はまだ行われていない。2012 年農曆正月初一日から、現在の〈廟〉での儀

礼が行われている。また、この移転に際して、〈盤王〉の像を新たに作った。

2.4 他の村の動向

このような〈廟〉を作る動きは、他のユーミエン村落でも見られる。HCPの隣の村でも〈廟〉が作られるという話があると聞いた。また、筆者が長年調査村としてきたナーン県ムアン郡のNG村でも、やはり「ユーミエン文化センター」の名目で〈廟〉作りが進んでおり、建物は建っているが、神像はまだない。ここでは、シャマン儀礼でなく、祭司による伝統的な儀礼が時々に行われている。このほか、ナーン県ムアン郡のLBY村でも、〈廟〉を作る計画があるが、用地の選定に手間取り、まだ着工には至っていない。

興味深いのは、HCP村の場合も、NG村の場合も、対外的には表だって宗教施設の形をとらず、「ユーミエン文化センター」という名目で実質的に〈廟〉を作っていることである。宗教施設とすることによる様々な法的制約を回避する狙いがあるものと思われる。

3. 祭神

HCPの〈廟〉では、儀礼は農曆の毎月初一日と十五日に行われる。新年の時は正月初一日から初三日まで、七月中旬には十四日と十五日に行う。漢族では七月十五日に中元節で祖先を祀るが、ユーミエンでは七月十四日を〈過十四〉*kia tsiep fei*といい、この日に祖先祭祀儀礼を行うことになっている。

〈廟〉で祀っている神は、①〈盤王〉(〈盤皇〉)と②その妻(写真3)、③〈唐王〉*Toanghung* ④とその妻、⑤〈將軍〉*Tshiangjun*の像、⑥〈七妹〉*Siamua*を描いた木板(写真4)、⑦〈老君〉*Lukuan*、⑧ *Fuhei tsei-mwei*、⑨〈郎老〉*Longloa*などが祀られている。⑩〈観音〉*Tsiem yem*は、2012年6月までは〈廟〉の中に祀られていたが、2012年8月時点では、仏堂の方に移されていた。

①～④の〈盤王〉と〈唐王〉は、ユーミエンの神話に関わる。タイ北部のユーミエンに広く伝わる渡海神話＝〈漂遙過海〉*Piuiu-kiakoi*神話の概略は以下の通りである。

ユーミエンの祖先が南京にいたとき、2年続く干魃に遭い、船に乗って逃げた。海を渡る途上嵐に遭い、難破しそうになったところ、〈盤王〉〈唐王〉〈五旗兵馬〉という神に助けられ、広東に上陸して感謝の儀礼を行った。その後分散して移住していったが、〈盤王〉と〈唐王〉に対する謝恩儀礼は世代を継いで続けられている。

①〈盤王〉と③〈唐王〉は、ユーミエンの祖先を救った神と位置づけられている。謝恩儀礼は〈歌堂〉*Dzoudaang*という(表1: 1-C)。〈歌堂〉は、タイ北部でも行われている。毎年行う儀礼ではないが、数年から十年前後の間隔を置いて、重要な儀礼と併修される。通常の〈歌堂〉儀礼では、神像は祀らない。また、〈歌堂〉では〈盤王〉を讃えた〈盤王大歌〉などの歌を唄う。〈盤王〉を祀る前は、作物のできが悪く困窮していたが、〈盤王〉を祀るようになってから作物のできが良くなったという話も聞かれた。

⑤〈將軍〉は、〈盤王〉の配下の將軍である。このほかに、護衛の兵の像が二つある。⑥〈七妹〉は、〈盤王〉の娘の七姉妹である。〈盤王〉と〈唐王〉と〈七妹〉は、天上ではなく、中空の〈半天高樓〉*Pientin khulau*というところにいるという。これは表1のB列の儀礼の対象となる〈玉帝〉*Nyuttai*の住むところでもある。高位ではあるが比較的身近な神が〈半天高樓〉に住んでいると位置づけられよう。

⑦〈老君〉は、ユーミエンに〈三清〉*Faam tshing*の法を教えた神である。⑧ *Fuhei-tseimwei*の *Fuhei*は〈伏羲〉であるが、*tsei-mwei*に相当する漢字をまだ同定できていない。天下に大洪水がおきて兄と妹のみが残り、その二人が現在の人類の祖となったという洪水-兄妹婚神話(「伏羲女媧」神話)と同様の神話がユーミエンの許にも伝わっている。それに基づく神である。⑨〈郎老〉は、洪水後の *Fuhei-*

tseimwei に夫婦になるよう諭した神であるという。⑩〈観音〉は、こうした伝承とは別に、漢人の観音信仰が波及したものと推される。こうして見ると、少なくとも、渡海神話と、〈老君〉が〈三清〉の法をユーミエンに伝えたという伝承、そして洪水神話の三筋の伝承に基づく神々が祀られているのである。多様な伝承知識が〈廟〉の祭神に顕れている。

4. 女性シャマン

4.1 ユーミエンの従来宗教職能者

〈廟〉における儀礼は、従来宗教職能者とは異なったタイプの職能者が行う。従来ユーミエンの宗教職能者には、祭司（〈設鬼人〉・〈師公〉）とシャマン（〈発童人〉）との二つのタイプがある。祭司は読経し、儀礼を司祭する。基礎的な儀礼（表1のC列）を行えるレベルから、表1のA列の高度な儀礼を司祭できるレベルまで、3つのランクがある。表1の1.〈盤皇〉祭祀を除くC列の儀礼を行えるのが〈設鬼人〉 *sip mien mien* である。このほかにB列の儀礼を行える〈做師小人〉 *tsou sai toan mien*、A列の儀礼を行える〈做大師人〉 *tsou tom sai mien* がある。シャマン（〈発童人〉）は、トランス状態に入り、〈童子〉という霊を憑依させ、その力で儀礼的な問題解決を行う。〈発童人〉には唱え言はあるが、大体暗誦しており、経文は用いない。また、言葉による託宣は行わない。いずれもトランスに入って神霊が降りるとされる点で同じである。

4.2 HCP村の女性シャマン

HCP村の〈廟〉における儀礼の宗教職能者には、二種ある。一つは〈盤王〉や〈七妹〉などの神が降りてきて託宣や治療行為を行うシャマンである。もう一つのタイプは、敢えて分類すると、シャマン祭司 (shaman-priest) である。すなわち、トランス状態に入って神霊が憑依した状態で、他の神霊に対する儀礼を司祭するのである。

ただし、ユーミエンによると先に述べた〈発童人〉とは異なり、「神が降りる」 *mien gia taai* または〈入陰〉 *pia yem* という。〈発童人〉に降りるのが下位の霊であるのに対し、〈入陰〉の場合は、上位の神である点異なる。託宣を行う場合、通常の話言葉で託宣する場合もあるが、多くの場合は歌で託宣する。ユーミエンの歌は通常の話言葉と異なり、〈歌話〉 *dzung waa* という、歌用の語彙を用いて唄われる。それ故、歌を唱うためには、歌の節とともにこの〈歌話〉を習得していなければならない。単に話し言葉に節をつけただけというわけではないのである。

シャマンやその親族に訊いてゆくと、シャマン当人は普段の神降しない状態では歌を唄えない（すなわち〈歌話〉を知らない）が、神が降りると歌を唄えるという答えが、多くのインフォマントから返ってくる。また、託宣の内容は、トランスから醒めると憶えていないとも言う。これらは決まり文句である。確かに、日常的には歌を唱う機会は滅多にない。歌唱が行われる典型的な機会は婚礼であり、そこで言祝ぎの歌を唱う。それだけ非日常的な行為である。そのため、二つの意味で、〈歌話〉による儀礼は特異である。一つは〈歌話〉がもっている非日常性、もう一つは普段歌を唄えない者が神降したときには唄えるという神降の示徴性である。

シャマンの多くは歌を唱うが、少数の者は唄わない。これは降りてきた神が歌を唄わないからと説明される。その際重要な役割を果たすのが〈釧〉 *cim* という儀礼用のナイフである。これは、通常の儀礼でも、ただの水を聖水に変える所作や、空中に文字を書いて、悪霊を封じ込めるなどの呪術的所作において多用されるものである。これを〈廟〉の儀礼においては多用している。病気のクライアントに向かい空中を突く所作を繰り返す、呪的な力をクライアントに及ぼそうとする所作がよく見られる。実際に〈釧〉は、多くの女性シャマンが持っている。また、神の意志を聞く〈筭〉 *jaau* という道具も多用される。〈筭〉は、円錐台を縦に割った形をしており、先細りの蒲鉾のような形をした物二つ一組で構成される。この二つの〈筭〉を抛り投げ、二つの〈筭〉の平面が上になるか、曲面が上になるか

で神意を問うのである。平面が陽、曲面が陰であり、その陰陽の構成が神や祖先の霊の意思として現れるとされる。この道具も通常の祭司が使う物であるが、これも〈廟〉の儀礼において、女性祭祀者によって多用されている。

HCP の〈廟〉で農暦の毎月初一日と十五日に行われる儀礼〈拝盤王〉は、女性が多く参与している儀礼であるが、男性祭司も重要な役割を担っている。〈拝盤王〉の儀礼を主導しているのは、盤 ZF である。彼は儀礼では降神して歌で儀礼を行っているほか、儀礼の全体の進行役でもある。このように重要な役割を果たしているが、彼は祭司としては最も基本的な儀礼を行う〈設鬼人〉にとどまっている。これは本人によると、漢字の識字能力が〈做師小人〉をつとめられるほどのレベルに達していないからだという。1.〈盤皇〉祭祀以外の C 列の儀礼は、唱え言を暗誦している場合が多いが、B 列と A 列の儀礼は経文を読まなくてはならないからである。その盤 ZF が〈拝盤王〉で中心的な役割を担っているのは、降神して歌で儀礼を司祭しているからである。漢字識字能力が十分でなくても、歌で儀礼を行うシャマン祭司として活躍の場を得ているのである。

4.3 他の村における儀礼

HCL や HCP に倣って〈廟〉の建設を目指している NG 村では、上に述べたように、男性祭司による伝統的な形式の儀礼が行われている。ここでは、HCP 村におけるような新たな女性宗教職能者の登場は現在の所見られない。一方、まだ〈廟〉を建設していない LBY 村では、1992 年から、女性シャマンによる降神と託宣の儀礼が行われている。当の女性シャマンに聞いた話では、1992 年に観音が神降したのが始まりであった。儀礼の日取りは定期的でなく、神が神降する日を伝えてくるとの話である。観音の他に、〈盤皇〉の妻、〈唐王〉の妻も神降するという。ここでは、託宣は歌の場合もあり、経文の文言も託宣として語ることもあると彼女は述べていた。

2003 年に見聞した HCL の〈廟〉における儀礼では、祭司は男性であり、シャマンは登場していなかった。しかし、女性が積極的に儀礼に参加しており、トランスには入っていなかったが歌も盛んに唄っていた。

5. 考察

5.1 固定的宗教施設の意味

固定的〈廟〉を建設するという事は、〈廟〉建設に関わった人々について、定住の意志が固いことを示している。実は、固定的宗教施設を作ることは別の意味もある。すなわち、ユーミエン独自の〈廟〉は、他者に対してユーミエンの宗教活動を顕示することになる。祀られている神の中心〈盤王〉はユーミエン独自の神である。漢人には盤姓はない。「盤」という姓自体が、ユーミエン独自のものであり、且つ、〈盤王〉はユーミエンの祖先を救った神である。「盤」の持つこの二重の意味が、ユーミエン独自の神としての意味合いを強くする。現在、〈廟〉を建設しようとしているミエンの人々には、自らの民族文化を外部的に示したいとの意志を看取することができる。

中国国内では廟を祀っていたユーミエンもいることから、国境を越える移動の中で顕現しなかった固定的宗教施設〈廟〉が、タイにおける定住化にもなって顕れたとも言えよう。いくつもの国境を越えた末の現象であるが、HCL 村は中国国内のヤオ族の〈廟〉にその範を採り、HCP 村の最初の〈盤王〉像は中国で購入された。ここには、国境を越えたユーミエンのネットワークが存在し、情報や物の移動を促していることが見て取れる。〈廟〉の出現には、こうした要因も関わっているのである。

5.2 歌唱による儀礼進行の意味

HCP 村のように、儀礼を読経ではなく、歌唱によって進行するというのは、新たな儀礼形態である。従来の儀礼では、男性祭司が経文を読誦するかたちであるが、〈歌話〉を使った儀礼では、経文の

読誦はほとんど見られない。これは、女性が主体となっているためでもある。実際、漢字を読める女性は少ない。簡単な儀礼を行うには、経文を暗誦すれば良いのであるが、複雑な儀礼となると、漢字で書かれた経文を読めなくてはならない。漢字の読誦能力が、女性が祭祀活動に参入できない障壁となっていたのである。経文ではなく〈歌話〉による儀礼司祭という形は、この障壁を飛び越えるものであった。また、従来の儀礼は男性がイニシアティブを取って行い、儀礼の場には男性のみが参列して、祭司も男性といった、儀礼における男性中心主義があったが、HCP 村および HCL 村の〈廟〉における祭祀活動、LBY 村の儀礼においては、参加者の数においても、個々人の熱意に関しても、女性が圧倒的に多く参加している。それも女性自身の自発的な参加の面が強いのである。

これは、表 1 の 1.〈盤皇〉祭祀の〈歌堂〉と関係がある。先に述べたように、〈歌堂〉は、儀礼中で〈盤王大歌〉などの歌を唱う。そして、女性も儀礼中でその唱歌を担当するのである。こうした点を踏まえると、〈拝盤王〉の儀礼は、儀礼中の女性の歌唱という、〈歌堂〉の形式を応用していると見なすことができる。

祭祀者たちが唄う〈歌話〉が果たして神降によるものか、あるいは素面でも唄えるのかは、実は定かではない。観察していると、トランスに入らなくても歌を唄える人もいるように思える。しかし、これらの儀礼によって、歌唱の伝統が活性化していることは確かなようである。ユーミエンの文化復興運動は、漢字の教習に重点があった（吉野 2006, 吉野 2010）。漢字の読誦能力と、〈歌話〉を操る能力は、いずれも新しい世代になって衰退するかと思われた。漢字の能力は必ずしも復興しているとは言いがたいが、〈歌話〉の能力は、それに比べると活性化しているのである。

6. おわりに

現在タイ北部のユーミエン社会で生じている宗教現象について、簡単に報告した。HCP で展開された現象について、その特徴をまとめると、以下のようになろう。

- 1) これまで移住生活を続けてきたユーミエンにとって、「初めての」固定的祭祀施設を建設していること。「初めての」というのは、過去の祖先たちの代にこうしたことがあったかなかったかは確かめようがないからである。少なくとも現在生きているユーミエン個人にとっては初めての現象である。
- 2) その固定的祭祀施設が〈盤王〉を祀る〈廟〉であること。これは、ユーミエンにとって民族アイデンティティの表出であるとともに、祖先を救った〈盤王〉に自分たちも救われようという指向の表れでもある。
- 3) 一方で、こうした〈廟〉の出現には、国境を越え中国へ到るユーミエンのネットワークが関わっていた。
- 4) 女性が儀礼に積極的に参加していること。これは HCP 村だけではなく、HCL 村や、LBY 村にも見られた現象である。〈盤王〉を祀る活動に女性が積極的に、且つ男性よりも多数参加していることは、従来のユーミエンの儀礼には見られない特徴である。
- 5) 儀礼の司祭にも女性が参加していること。単に儀礼の場に参加するだけでなく、女性が儀礼司祭者となっているのは、従来のユーミエン社会には見られない現象である。少なくとも現在生きているミエンにとって、さらには、その一、二代上のミエンにとっては、全く新しい現象であろう。
- 6) 〈歌〉が儀礼司祭の要となっている点。これは、従来の儀礼の多くが祭司による読経ないし経文の暗誦であったのとは大きく異なる。

現在の時点において、以上の特徴が看取された。しかし、新しい現象であるが故に、儀礼のやり方など、定式化していない面もある。調査に行くたびに儀礼の進行形式が少しずつ変わっているのである。また、託宣の内容など、これから追究すべき課題も多い。

付記 1 本稿は、吉野 2013 を部分的に削除し加筆したものである。

付記2 本稿は、以下の科研費による調査研究の成果の一部である。科学研究費補助金基盤研究 (B) (海外学術調査) 課題番号 22401046-1 (研究代表者: 塚田誠之)

また、科学研究費補助金基盤研究 (B) (海外学術調査) 課題番号 20401013 (研究代表者: 廣田律子)、科学研究費補助金基盤研究 (A) 課題番号 22251003 (研究代表者: 片岡樹)、科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 23520982 (研究代表者: 吉野晃)、科学研究費補助金基盤研究 (B) (海外学術調査) 課題番号 24401018-1 (研究代表者: 廣田律子) によって行った調査の成果の一部も使用している。

注

(1) 本稿におけるミエン語 (ユーミエンの用いる言語) の表記は、印刷の煩瑣を避けるため IPA をそのまま用いず、Downer 1961 と Lombard & Purnell 1968 を参照して筆者が手を加えたものを用いる。子音・母音ともにローマ字読みするが、幾つかの付則をもうける。例えば子音の h は帯気音を示し、よって th は /θ/ ではなく、帯気歯茎破裂音 /tʰ/ を示す。その他の付則は以下の通り。

子音: c= 不帯気の硬口蓋破裂音 /c/, j=/j/, hy=/ç/, ng=/ŋ/ (ng は末子音、頭子音のいずれにもなりうる), ny=/ɲ/, mh, nh, nyh, ngh は帯気の鼻音であり、h の前の鼻音を発音するときに氣息を伴う。lh も同様に帯気の流音である。

母音: a=/a/, aa=/aː/, ae=/ɛ/, oa=/ɔ/, oe=/ə/, ou=/əu/, oi=/ɔi/, ua=/uʌ/, ia=/iʌ/ とする。ミエン語には a/aa 以外は母音の長短の弁別はない。声門閉鎖は q で示す。

ミエン語では声調も音素であり 6 種の声調があるが、声調は煩瑣になるため表記を省略した。ユーミエンが用いている漢字表記は 〈 〉 で括弧で示す。

タイ語の表記は、概ね上記のミエン語の表記と同様である。ミエン語表記と異なる点: 母音には長短の弁別があるのでコロソ (:) で長音を表す。たとえば aː=/aː/ である。ミエン語にない母音は次のように表記する。ue=/uɪ/。声門閉鎖はアポストロフィ (') で示す。音節末子音: -y=/-j/, -w = /-w/。

例外として、個人名の表記では長音符を外す。文献の著者氏名は、本人が用いているローマ字表記があればそれを採用する。地名の表記は、上記の原則にかかわらず、タイの道路標識などで採用されている方式に従う。たとえばパヤオ県の「パヤオ」は上記の原則では Phayaw となるが、一般には Phayao の方が通用しているので、後者の書き方に従う。ナーン県の「ナーン」も上記原則では Na: n であるが、通用している Nan の表記を採用する。

(2) モンコンは、〈唐王〉を中国唐代の皇帝であると記述している (Mongkhon 2006: 262)。これは他のユーミエン村落で聞かれる〈唐王〉の解釈とは異なるが、HCL 村でこのような観念が通用していた可能性はある。

(3) 本稿では、「神を降ろす」を「降神」、「神が降りる」「神が降りた」を「神降」と記述する。また、「祭司」はプリースト型の宗教職能者を示す名詞として用い、「司祭」は「司祭する」という儀礼執行行為を表す動詞の語幹として用いる。

参考文献

Downer, K.

1961 Phonology of the word in Highland Yao. *Journal of the School of Oriental and African Studies* 24 (3), pp. 532-541.

Lombard, S.J. (comp.)/ Purnell, H.C., Jr. (ed.)

1968 *Yao-English dictionary*. (Cornell University Southeast Asia Program data paper 69) Ithaca: Cornell University.

Mongkhon Chantabumrongs

2006 Reproduction of Yao culture: a case study of Pien Hung shrine at Ban Huey Chang Lod in northern Thailand. 塚田誠之編『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』(国立民族学博物館調査報告 63) 吹田: 国立民族学博物館, pp.249-266.

吉野 晃

2006 「タイにおけるユーミエン (Iu Mien) の文化復興運動概況」塚田誠之編『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』(国立民族学博物館調査報告 63) 吹田: 国立民族学博物館, pp.267-284.

2010 「タイ北部におけるユーミエン (ヤオ) の儀礼体系と文化復興運動」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』東京: 風響社, pp.237-299.

2013 「廟と女性シャーマン—タイ北部、ユーミエン (ヤオ) の新たな宗教現象に関する調査の中間報告—」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系II』64, pp.115-123.